聖霊降臨後第15主日聖餐礼拝説教 August 28, 2016

「Humility-謙虚」

ルカによる福音書14：７–14

by Rev. E. Carl Zimmermann

引退教師のフローレンスは、きっと時間を持て余していたのでしょう。毎週日曜日の礼拝に、彼女は聖書と、小さなノートブックを持参して来ていました。私が説教をしている間、彼女は私の説教の文法的な間違えを記録していたのでしょう。

彼女は、私の発音の間違えに体をすくませ、懸垂分詞　（主語が誰か特定できない分詞構文）を使おうものなら怒って顔を真っ赤にしていました。

彼女は、私が副詞と形容詞の使い間違えをしないかどうか執拗に気にしながら、どうにかして英語の言語を守ろうとしていたのです。彼女は威勢のいい、頭の固い、絶対に妥協をしない人で、いつも後ろから三番目の席に座っていました。　彼女が何年も前からの真面目なメンバーだという理由から、フローレンスは、自分が座る場所は自分だけの「聖地」であり、それを認めない人物がいるとしたら、神様がその人にそれなりの対応をすると思っていたのです。

ある日曜日のことでした、およそ礼拝が始まる10分前に,私は彼女が礼拝の訪問者から自分の「聖地」を奪い取り返し、その席から追い払うという恐ろしい光景を目撃したのです。礼拝の後、恥ずかしさと苛立ちを覚えながら、私は訪問客に謝罪しました。訪問客は気持ち良く理解してくださいましたが、二度と礼拝には来られませんでした。

私はフローレンスを訪ねて、彼女の行動がいかに自分勝手で不親切であるかを話してみましたが、彼女には通じませんでした。彼女にしてみれば、自分は座りたいところに座る、それが誰かを怒らせるなら、そんなの知ったこっちゃない、という感覚なのでしょう。

このようなフローレンスの行動に、私たちは笑ったり身をすくめたりしますが、真実を語っているのかもしれません。

私たちの殆どが、礼拝堂のお気に入りの席があって、もしそこから移らなければならない時は、ちょっと気分を損ねたりするわけです。

幸いなことに、イエス様の時代に行われた座席指定の習慣は、もやは今の時代には適用されません。あの頃は、何かの行事があると、誰がどこに座るかというのは皆が同意の上でのエチケットでした。誰がより裕福で、より影響力があるかによって決められたのです。あなたが誰か、何をしている、どれほど儲けているか、それらによってあなたの座る席が決められたのです。

結婚式の席順を決めるのに苦労したことがある方には、私の話していることが必ずわかるはずです。

古い時代は、催しがどれほど盛大かによって座席の輪が設置され、部屋の中央に上客が座るようになっていました。地位が上になればなるほど、主人の近くに座れたわけです。しかし、このやり方にも困る時があったのです。もしあなたが中央近くの良い席に座っていたとして、あなたよりも地位の上の人が遅れてきたとしたらどうでしょう？パーティーの主催者はあなたを他の席、大抵は後ろの方の席、に移ってもらうことになるでしょう。ちょっと想像してみてください、　あなたがパーティーで、すでにサラダのコースが始まった時、お偉い人が来たからという理由で、急に台所に設置された子供達のテーブルに移るようにと言われたらどうします？

ご想像の通り、イエス様は、名声があるとかないとかで人々があっちこっちと移されるのを面白く思っていませんでした。イエス様は、その人が着ているものとか、お財布にどんなクレジットカードが入っているかなどの理由から差別されたり区別されたり隔離されたり除外されたりすることを好みませんでした。

ですからイエス様はその場の状況を、教える機会に丁度良いと思ったのです。　教える対象は招待者と招待客でした。

客と招待する者への教訓（ルカによる福音書14:7-14)

イエス様は、客には謙虚さについて教えました。

招いてくれた人には、人を招く時に選り好みしないようにと教えました。

自分は上席に座るに値すると思っている客に、イエス様はこう言われました：

「婚礼に招待されたら、上席についてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれているかもしれない。」この教えは、私たちが生まれ持っている自我と、謙虚さのバランスをとるようにとたしなめているのです。

C.S. Lewisはこう書いています：「真の謙虚さは、自分の存在を小さく考えることではなく、自分のことだけを考えるのを少なくすることだ。」

謙虚さとは、自分が舞台の中央に立つ資格があるとはわかっていても、そのようなスポットライトを浴びる必要はないと分かっていることなのです。

そして、イエス様は招いてくれた人に向かって、宴会を催す時には、むしろ貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさいと勧めます。

イエス様は、彼らにそういう人たちを招いて欲しかったのは、その人たちが良い食事を必要としていたからではないのです。そうではなくて、その人を理解するたったひとつの方法は、その人と実際に顔と顔を見合わせて知り合うことなのです。

彼の名前はロバートと言いました。彼は教会のメンバーでしたが滅多に出席しませんでした。私は、それは彼が重い病気で入院しているからだと知りました。

私が彼の病室に着いた時、看護婦から手をよく洗うようにと言われました。

そして、患者と直接触れることを避けるために、消毒されたガウンとマスク、

手袋をするようにと言われました。

これほど厳重に注意されるだけで、私はとても心配になりました。

ロバートは、辛そうに息をしていました。そして彼の皮膚の色は灰色でした。

私は彼の病状が全くわかりませんでしたが、あまり良くないことはわかりました。

彼の母親の説明によると、彼は同性愛者であり、彼の病気はAIDS、そして死が差し迫っているとのことでした。

私は、未だかつて身近にAIDS患者がいたことがなく、あの頃はこの病気がどのように感染するのか誰も定かではなかった時代でした。言いようもない不安に襲われた私は、どうにかこの場をでなければと、おかしな言い訳をしてその場を去りました。祈りながら急いでトイレを探して駆け込み、火傷するような熱いお湯で

20分もかけて手を洗いました。

もちろん、私はロバートが苦しんでいるのはわかりましたが、どんなことをしてでも彼を避けなければ、と思ったのです。やっと車に戻った時、自分が病気に感染して、紫色に腫れ上がった姿を想像して、文字通りガタガタと震えていました。

いくら牧師らしくないと言われても、私は二度とロバートを見舞いには行くまい、と心に誓いました。

しかし、私は再び彼を訪問したのです、しかも見舞いに行くたびに私の訪問時間は長くなりました。そして、気楽に彼と話せるようになり、恐怖感も和らいでいきました。彼の病状が悪化すると同時に、私の訪問も頻繁になりました。

多分彼は徐々に私を信用してくれたのでしょう、私があまり知らなかったことや、全く知識のなかったことを話してくれました。同性愛とはどういうことか、そして同性愛の社会に生きていくことはどういうことか。同性愛者であることから、

解雇されたり、追放されたり、嫌がられたりされることが、どんなことかを

話してくれました。

ロバートの生き様は私にとって違う世界でした。だから私は完全には理解できなかったし、落ち着かない気持ちもしました。でも私はそこに座って、彼の話を聞き、彼と共に祈ったのです。私にとってそれは目から鱗の体験だけではなく、私の心をも大きく開いていくような体験でした。

私にとってロバートの存在は、恐ろしい病気にかかった同性愛の男性ではなく、目の前に近づいている死に必死に立ち向かおうとしている人の姿に変わっていったのです。

お分かりのように、これがあなたの全く違う人物をあなたの人生に招き入れるということなのです。それはあなたが怖れているような人たちや、あまり聞いたようなこともないような人々かもしれません。

もう一度、今日の福音書の箇所を、今度は現代語訳（意訳）からご紹介したいと思います。

イエス様のみ言葉を注意して聞いてください。イエス様はただ単に誰を宴会に招くべきかを語っているだけではありません。誰を私たちの心に招き入れるか、

それがイエス様のみ言葉なのです。

「また、イエスは招いてくれた人にも言われた。朝食や夕食の会を催す時には、友人も兄弟も、親類も、近所の金持ち, 自分が好きな人たちを呼んではならない。

その人たちも、あなたを招いてお返しをするかもしれないからである。宴会を催す時は、お返しができない人たちを招きなさい。

あなたが普段、招待しようなどと思ってもみない人たち、仲間はずれにされている人や、　あなたとは全く違う世界に生きている人たちに招きの手を伸ばしなさい。その人たちを招くことによって、あなたがその人たちを祝福するだけではなく、あなたも祝福されるのです。彼らは多分お返しもできないでしょう、また彼らの家にあなたを食事に招くこともできないかもしれない、でもあなたの報いは天国にある、それがあなたの幸いです。」

きっとあなたの周りにもロバートはいます。貧しいロバート、ホームレスの　　ロバート、病気のロバート、みんなから嫌われているようなロバートがいるでしょう。あなたが一生出くわしたくないようなロバートもいるでしょう。あなたが全く理解できないようなロバートもいるでしょう。あなたが気にもかけたくないようなロバートもいるでしょう。

もし、そのようなロバートと一緒に座って語り合い、お互いに理解できるように

なれたとしたら、あなたの周りはどう変わっていくと思いますか？

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　翻訳：芙美Liang